

京都市基本計画審議会 第2回活性化部会
摘 録

日 時：平成21年12月15日（火）14：00～16：10

会 場：京都市国際交流会館 特別会議室

出席者：

- | | | |
|---|--------------------|-------------------------------------|
| ○ | あきづき けんご
秋月 謙吾 | 京都大学大学院公共政策連携研究部教授 |
| | いちかわ みつぐ
市川 貢 | 北区基本計画策定懇談会座長，京都産業大学経営学部教授 |
| | いわい よしや
岩井 吉彌 | 元京都大学大学院農学研究科教授 |
| | かわむら りつこ
河村 律子 | 立命館大学国際関係学部国際関係学科准教授 |
| | そん みへん
孫 美幸 | 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程 |
| | たかしま まなぶ
高嶋 学 | 京都府政策企画部長 |
| | たなか しょう
田中 翔 | 公募委員 |
| | つじ としこ
辻 俊子 | 公募委員 |
| | にしむら あけみ
西村 明美 | 柊家株式会社取締役 |
| | はしづめ しんや
橋爪 紳也 | 伏見区基本計画策定委員会座長，大阪府立大学観光産業戦略研究所長 |
| | ひらい せいいち
平井 誠一 | 京都市未来まちづくり100人委員会代表幹事，株式会社西利代表取締役専務 |
| ◎ | ほりば あつし
堀場 厚 | 京都経済同友会特別幹事，株式会社堀場製作所代表取締役会長兼社長 |
| | まつやま だいこう
松山 大耕 | 未来の担い手・若者会議U35議長，妙心寺塔頭・退蔵院副住職 |

以上13名

(50音順，敬称略)

◎…部会長，○…副部会長

1 開会

2 報告

堀場部会長

報告案件として、第1回融合委員会の報告と第1回部会の振り返りから行う。私は第1回融合委員会に出席できなかったため、秋月副部会長から報告をお願いする。

秋月副部会長

融合委員会は、各部会の最終プロダクトを持ち寄るだけでなく、プロセスにおいても情報交換、融合を行うメカニズムを持っていると思うが、まだ各部会が1回ずつしか行われておらず、第1回の融合委員会はリハーサルという印象であった。参加者は部会を代表してではなく一委員として、同じ部会の委員が固まらないようランダムにテーブル分けをし、KJ法で意見を持ち寄った。まだ十分にまとまったものではないが、多数集まられた委員一人一人の意欲はかなり高いと感じた。

融合委員会と部会の関係がどうなるのかを十分に掴めたわけではないが、部会長及び会長による会議がその後に開催されたので、今後、この二つの会議で折り合いを付けていくことになると思う。

堀場部会長

第1回部会の振り返りだが、資料2に要点をよくまとめていただいた。

進め方としては、10年先を見通したビジョンを考えてそれを落とし込んでいく。その際には、京都の人とまちをしっかりと見据える。京都の魅力の創出、本物の京都とは何ぞやということを考えてアウトプットしていく。そして、いろいろな人たちが集まってこそ京都が活性化し、魅力的になる。人々とどのように協力し、活性化させ、育成していくか。それは、行政だけでなく、市民全体を巻き込んでいく、あるいは府市協調で、オール京都で対応しなければと成功に結びつかないのではないかと、といった議論がなされた。

各委員はいろいろな分野で活躍しておられ、いろいろな知恵が出てきたのではないかなと思う。それをベースに審議案件に入っていきたい。

今回は観光、大学、国際化の3つの分野について、今後進むべき方向を議論していきたい。

まずは観光分野から始める。

——（事務局から観光分野について説明）——

堀場部会長

現状と課題、政策の基本的な方向性、市民と行政の役割、どのように共汗していくのかなどを含めて意見交換をしたい。

「未来・京都観光振興計画 2010⁺⁵（中間案）」はよくまとまっており、具体的な行動にも踏み込んでいる。これをどのように展開していくのか。観光だけでなく教育の場でもどのように取り組んでいくのかといったことも課題である。

平井委員

観光の計画の委員会にも参加しており、意見を反映してもらっている。

パブリックコメントをもらうためには、できるだけ具体的な方がよいが、具体的過ぎると、基本計画ではなくアクションプランになる。できれば、これとは別に、市民参加を促していけるようなアクションプラン的なもの、どう手伝わたらよいか分からない人

たちをいかに吸い上げてくるためのプランがもう一つ必要である。

これまでの 5000 万人構想は、市と観光事業者が中心で推進してきたと市民は見ている。これからは、京都市民もおもてなしの力を高め、市民と観光事業者が中心となって進めていくことが、量から質の時代にあっては重要となる。行政は少し後ろに下がって、経済界、市民、行政の役割を明確にし、分担して一緒にやっていくことが重要である。

堀場部会長

5000 万人構想は成功したが、一方で交通渋滞等によってまちが汚くなったという状況もある。今おっしゃったような総合的なアプローチがないと市民の協力が得られない可能性が出てきている。

橋爪委員

観光の計画策定については私が副委員長（委員長代行）を務めている。この計画の 5 年間の次の 5 年後をどうするのか。それをこの 10 年の計画でも盛り込んでいただきたい。まず、活性化部会全般にかかわることとして 3 点申し上げたい。

1 点目は、京都をどうするのかだけでなく、広域的な視点で京都はどのような役割を果すのかを考えなければならないという点である。世界、東アジア、国内、関西それぞれにおける役割がある。特に、観光は都市の総力として考えるのが当然である。そうすると日本の中での京都の役割も明らかになる。

2 点目は、危機感を持つべきところは明快に持つべきだという点である。観光でも希望の持てるビジョンを描きがちだが、例えば MICE の分野では、アジアの中では施設的には遅れている。国際会館、岡崎界わいも手を入れるべき時期にある。都市間競争の中では非常に不利であり、危機に瀕していると認識し、だからこそこういうことを取り組むと言ったロジックが必要である。

3 点目は、市民全てがステークホルダーだという点である。全ての市民がコンシェルジュになるような都市が最も質の高い観光都市である。そのあたりについて、今回の計画に盛り込んだつもりである。

あと 2 点申し上げたい。

観光の根幹にあるのは京都市民のライフスタイルである。食文化、様式美、伝統的な物語、歴史文化財など生活の在り方から派生したものが観光に及んでいる。こうしたものの質をいかに考えるかが大事。我々の生活様式や生活文化を、必要なものはつくりなおし、大事なものは残す、そこから新たな観光が生まれる。生活文化に関わる産業全てが循環の中で観光につながっているという認識を持たなければ、観光事業者だけの話になってしまう。

京都が伸ばすべき産業分野として、ライフスタイルに関わる産業は京都の得意技であった。観光はその総合的な成果である。生活文化、文化的な価値と産業の間うまく橋をかけながら、京都の新たな活力を生み出していく産業政策をぜひ今回の計画に盛り込んでいきたい。

堀場部会長

観光という言葉から感じるイメージではなく、もう少し広い範囲で理解する必要があるという御指摘であった。

観光客の質を上げる点で、施設の問題がある。国際会館のメインホールの収容人数は約 1,900 人だが、5,000 人入らなければ国際会議ができない。世界的な業界の催物や学会を開催するにはスケールが十分ではない。このような大規模な催物は大阪、神戸、横浜の会議場などに流れている。増築は何度も話題に出ているが、京都全体で後押ししていくことが必要である。

また、京都会館も出来た頃は最先端で立派なホールだったが、いつまでもこのままでよいのか。一流のミュージシャンの招致が難しくなっている。まさしく「器」の問題がある。

これらのことはどうしても財政の話が避けられないが、ホテルやイベント会場などの集客できる公共施設の整備をはじめ、基本的な問題に目を向けていかなければならない。

孫委員

「市民のライフスタイルの総合的な成果としての観光」についてだが、観光は大学や国際化に全部つながると感じた。自転車で京都の豆腐屋さんを巡るツアーに参加したが、その折に、豆腐屋さんがみんな自分の代で終わらせるとおっしゃった。京都の面白い観光、ディープな観光が難しくなっていくと感じた。京都らしい観光を考えた際に、どうい産業をバックアップするのも課題である。

国際会館を利用される世界中の方々が周辺の界わいを回遊されるが、食事をするところもなく、コンビニ1軒だけが大繁盛している状態である。もったいないと思う。国際会館の充実だけでなく、この界わいを世界にアピールできるような活性化も考えられないかと感じた。

堀場部会長

観光地と周辺地域のトータルでの開発が一部地域ではまだできていない。そのあたりを一つずつ解決していくしかない。イタリアのミラノでは、多品種少量生産を維持する仕掛けが街全体に出来上がっているが、京都ではそういう街全体での連携がうまくとれていない。

松山委員

説明に2点欠けている。

1点目はお金の話である。いい計画と思うが、やるからにはお金の問題が絡む。お金の枠を作っておかないと、場当たりの的になってしまって未来永劫続く仕組みにはならない。税金という形がいいかどうかわからないが、寺、ホテル、食事するところなどがファンด์をつくり、少しずつでいいから貯めていって、観光なりまちづくりに使える仕組みができないか考える。

あと、ふるさと納税をすると地下鉄の1日乗車券がもらえるそうだが、それではふるさと納税をする人はいないだろう。ふるさと納税をする人は京都のファンである。ふるさと納税のお金で鴨川べりにベンチを作り、その写真を送るなど、もっと京都に親身になってもらえるようなことをしないと、お金も集まらない。

2点目は誰がやるのかという話である。担い手が高齢化し、後継者が居ない。祇園祭の鉦を引いている人も市内に住んでいない人がほとんどと聞く。祇園祭を守るにも、誰がやるのかをしっかりとしないと守れない。携わる人がやりやすいような仕組みをつくるようなサポートが必要ではないか。

最後に、特に女性にとって、観光地の印象はトイレで決まる。どこのトイレがきれいか、どこが洋式かなどを表示しておいて、快適に観光できるサポートができないか。

堀場部会長

具体的に行動していくときに費用、予算が発生する。それをどのように集め、分配していくかという御意見であった。

種々の活動、催しの計画がなされると寄付が集められるが、市民や企業のサポートでそういう活動が成り立っているのも事実である。しかし、活動を計画するごとに寄付を集めているととめどがない。先ほど出されたアイデア、利益負担ということも含めて考

えていかないと、市民全体のサポートを受けにくいのではないかと。

若い世代でこのような問題をどう解決していくのかも大事である。学生祭典も色々なサポートで成り立っている。学生祭典ではどのような取組を行っているか。

田中委員

学生祭典では、企業から多くの寄付をいただいている。お金については、大学生1人ずつから100円ずつ集める、企業からの寄付、行政からの分担金で、総額で7～8千万円を投資していただいている。企業に一社ずつ、学生が直にお願いに行き、話を聞いていただき、なおかつ協力をいただいている。応援していただいているなど思っている。

堀場部会長

学生一人一人が自らお金をだし、呼び水となって次第に大きな金額になっている。まさに、そういうアプローチが必要である。学生たちの想いに共感して皆さんがサポートしていると思う。

観光についてもそうした形が作れるか。行政の資金だけでやるわけにいかない。市民や市民以外のファンの方にも協力いただくような企画力が大事と思う。

西村委員

広告は抵抗があるが、協賛など一生懸命やっている人へのサポート、人を育てることについて京都の人は協力的である。まちは人々で成り立っているのだから、人を育てることを基本において積み立てていけば、スムーズにできるのではないかと。

新しいお祭りもよいが、地域にあるお祭りがなくなっていくことは、京都の魅力がなくなっていくことだと思うので、学生の方にも積極的に参加してほしい。

人を育てることは観光、大学、国際化につながると思う。哲学の道が有名になったのは、桜並木や疎水だけでなく、そこを哲学者が歩くことで発想の転換を得たこととか、京都の景色も全部含めての魅力である。

国際化については、大学の国際交流も少なくなっているようである。京都の魅力の向上には、人を基準に、地域との関係を密にしていくことが解決の糸口になるのではないかと。

堀場部会長

前回の部会でも出ていたが、京都の子どもたちに京都の魅力を教育の現場でアピールしていくことが大事である。それが、結果的に京都の市民をつくっていく。

橋爪委員

観光では、ホームタウンツーリズムといって、わが街をもう一度旅するというのを若い世代に働きかけていこうということを計画に盛り込んだ。京都の伝統や名所旧跡を知らない子どもたちや若い世代が多く、危機感を感じるべきである。「シビックプライド」、市民の誇りを醸成することが大事である。

ファンについては、市民が誇りを持ってなすべきことと、広く日本中、世界中から京都のために何らかのファンが集まるようなことを考えるべきである。御堂筋のイルミネーションは、日本中から寄付をいただき、行政が予算を追加して事業を行っている。京都市民だけではなく、日本中の人から寄付したいと思うような魅力的なプロジェクトを考えていくことが大事である。

堀場部会長

花灯路などは寄付で行われているが、全国規模に広げていくことが必要である。ただ、

京都には多くの取組があるため、サポートいただく方々の疲労感が懸念される。多くの取組がごく自然にあるという京都の特殊性を理解する必要がある。観光受けするところにはサポートするが、地道なところはサポートしないといったことになりかねないので配慮が必要だろう。

高嶋委員

来年の4月から、観光案内所を市と一緒に京都駅ビルで展開する。いろいろなニーズも把握できると思うので、観光客の声をよく聞いて、新しい施策につなげていきたい。

府の立場では、橋爪委員が冒頭に「広域における京都の役割」についておっしゃっていただいたが、東京と違う日本の代表都市は京都市と思っている。去年は源氏物語で、広域連携で人を呼ぶことができた。平城遷都1300年事業などでも、広域的な観光をリードするのが京都市だということで施策を組み立てていただけるとありがたい。また、連泊を増やすということで、天橋立なども組み入れていただければありがたい。

国際会館については、5,000人規模の会議場を政府に要望している。是非、力を合わせて要望していきたい。

堀場部会長

基本インフラ、公共的な施設は、ボストンなどの姉妹都市と比較しても見劣りする。更に強力に、市民・府民の後押しを受けて取り組んでいただきたい。

岩井委員

京都は社寺仏閣、日本庭園が特徴であるが、強調しすぎではないか。それ以外の多様な観光資源、梅小路蒸気機関車館とか、植物園、動物園など、家族連れを対象とした息抜きの場も必要ではないか。

この観光の計画に欠けているのは、景観の点である。市民の生活空間の点としては町家であるが、なかなか維持ができず崩壊寸前のところにある。観光で活用する必要がある。町家の町並みを保全して観光客に来てもらえば、京都の観光はもっと分厚く豊かになるのではないか。

京都の景観は主たる観光地以外はばらばらであるが、ヨーロッパでは観光地以外の普通の農山村でも大変美しい。自然の植生や、電柱がないこともあるが、建築規制が大変厳しい。

観光地の京都で、町家も維持できないのは恥ずかしいことと思う。京都市民が生活している場の景観の維持という視点も入れるべきではないか。

堀場部会長

ヨーロッパでは建物の外観は一切、自由に改築できない。パリのオフィスでも、中は超近代的でも外から見ると古いままである。対して、京都の町家は、同じ材料では建て直せないという、法律の問題が置き去りにされている。土塀で家が作れない。新築で町家が建てられない。なぜここにメスが入らないのか不思議である。

事務局（西村総合企画局長）

京都創生の取組を市政の重要な柱の一つにしている。都心の景観として、木の文化が息づく町家の景観は非常に大切であると考えている。まちづくりの資源であり、景観の資源であり、観光の資源である。この間、建築基準法、相続税等の問題について、国に強く要望してきた。歴史まちづくり法が去年にでき、これに基づいて、この11月に京都市の計画の認定を得た。国には、町家を維持するための財政的な支援や法律の柔軟な解釈などを求めており、国政上の課題として位置付けてもらっている。これからも引き続

き国の支援も得て、町家の保全・活用に努めたい。

堀場部会長

計画そのものについては特に御異議はないと思うが、ファンドの問題をどうするか、市、府の範囲だけではなくて全国的な展開が必要であるということ。また、京都の景観を含めた対応を考える必要があることなど、観光といっても非常に広い広がりがあるといった御意見だったかと思う。こういった点を、今後も配慮しながら対応していくことになる。国際会館の問題など、問題点がいくつか浮き出てきた。はずしてはならないポイントをきっちり押さえる必要がある。

市川委員

京都は素晴らしい文化遺産を持っており、文化的なポテンシャルは非常に高いが、それをどう伝えるかを考える必要がある。まずは情報を発信する。その次は、発信は一方通行であるので、返信を受ける、例えば観光客がどのような印象を持ったかを聴取し、悪い印象を持った点を解消していくことが必要である。

季節の移り変わりでお客の増減があるが、いつも何らかの行事があるはずなので、それを発信していくことが大切である。

また、誰がやるかに加え、誰が伝えるかも工夫が必要である。市民を巻き込んで汗をかく工夫があれば、京都に来る人の底上げが図れる。

堀場部会長

それでは、大学分野について説明をお願いします。

——（事務局から大学分野について説明）——

堀場部会長

京都市の人口の10%が学生である。大学流出の歯止めがかかって京都に戻ってきた。行政の努力もあるが、京都を離れることで大学の人気がなくなったという面もあるのかもしれない。また、コンソーシアムの活動は京都の大学全体のパワーアップになっている。

松山委員

京都にいるメリットがないとなかなか学生も集まらないだろう。フランスでは25歳以下の学生ならオペラの空席が安価に手に入るとか、美術館、博物館が無料になるというサービスがある。これを京都に応用できないか。寺社仏閣、コンサート、歌舞伎などが安く見られれば京都にいることに対するプレミアムになるのではないか。

もう一点、京都は「学生のまち」だが「若者のまち」ではないと思っている。学生が卒業したらみんな出て行ってしまふ。ボストンやハイデルベルグなど世界の大学のまちで学生を留めるのにどのような取組があるのか、その事例がヒントにならないか。

最後に、生活費の問題である。町家が守られないのは住みにくいからであり、高齢者にとっては大変である。住んでみなければ分からないが、守っていかないといけない。

家は住まなければ傷むので、町家、あるいはニュータウンの空家に学生に安く住んでもらえば、空家の対策にもなる。

事務局（吉川総合企画局大学政策担当部長）

フランスではサルコジ大統領が、学校の先生と25歳以下の青少年を対象に、ルーブル、オルセーなど国立の美術館・博物館の入場料を無料にすると発表した。EU加盟国の青

少年ないしは長期滞在する青少年を対象に無料にしている。なお、18歳未満は基本的に無料である。京都の社寺や文化施設でこれと同様の御協力がいただければ、委員御提案の取組は大変意義あることと考える。

学生の引きとめに関する海外の事例では、国レベルで政策を打っているところは多くある。イギリスでは、ブリティッシュカウンシルといった特別な部門を設けて、ビザの手続などを円滑化するなどの取組をファンドを組んでやっている。シンガポールでは、国家戦略として頭脳流出防止政策を採っており、ハーバード、MIT、ケンブリッジ等と連携して教育を提供するとともに、卒業後3年間シンガポールの企業に勤務した者に税制上の優遇を行っている。

海外の大学政策については今後研究していきたい。

堀場部会長

海外では寮が充実している。京都では、学生の住環境が厳しい。費用の問題もあると思うが、どのような対応をしているか。生活費は学生にとって切実な問題である。

事務局（吉川総合企画局大学政策担当部長）

学生の生活状態は年々悪くなっていると認識している。不況の影響もあり、学費の負担も大きい。住環境については、最低限の文化的な生活を送れる状態にはあると思うが、特にアジアからの留学生は非常に苦しい生活を強いられるため、一部屋に3人、4人が暮らすことがあるなど、住環境には各大学も留意されていると聞く。

堀場部会長

毎日生活する環境が良くないと、結果的に日本に来て良い印象がなく、良いものを学んで帰らない。大学そのものだけではなく、生活環境も考えていかなければならないと思う。

それでは、国際化分野について説明をお願いします。

——（事務局から国際化分野について説明）——

堀場部会長

大学や観光とも共通項が多くあるという印象を受けた。

河村委員

大学にしる国際化にしる、京都市への定住という課題がある。

学生では、大学の4年間だけ京都に居る方もあれば、通いの学生で京都市とのかかわりを持たない方も居る。外国人にしても、短期の方もあれば、永住の方もあり、それぞれの視点を持つ必要がある。

留学生を倍増し1万人にするということだが、本格的に留学生を迎え入れようとするなら住戸2,000戸では足りない。留学生が京都に来て良かったと思えるようにする必要がある。京都らしさということで町家の提供も考えてよい。短期の方にしても、将来観光客として帰ってくるとか、学会で来訪するとか、京都と深い関係を持つリピーターを育てていく観点が必要であると思う。

永住者、学生にしても、出身地のアイデンティティは持ちながらも、京都の一市民として誇りを持って生きていけるような、そういう観点が必要ではないか。

堀場部会長

確かに、阪神間から通っている学生も多く、たまたま学校のロケーションが京都であ

った、ということもあるだろう。

橋爪委員

コンベンションの開催件数についてであるが、国内の他都市と比較するのではなく、国際的な比較が必要である。

世界歴史都市連盟については、京都市は歴史都市 84 都市のリーダーとして関わっているが、今後 10 年間の途中で 20 周年が来るので、そのときに何らかの強いメッセージを京都市が世界に対して発信する機会とすればどうか。環境に関しては“DO YOU KYOTO?”というメッセージが出ているが、歴史・文化に関しても何らかの発信をすべきではないか。

堀場部会長

ボストンやパリは姉妹都市であるが、ボストンやパリに行ってもそれが知られていない。主要な姉妹都市で、景観の問題について意見交換したり、留学生を優先的に交換するなど市民が国際化していく中で、姉妹都市をきっかけとして活かしていくことが必要である。一部の市民だけが頑張るのではなく、市民が広く取り組むようアピールすることが必要である。アジアとの関係強化も大事である。

孫委員

大学で、元気な学生は飛び回って活躍しているが、いつの間にか居なくなる学生が心配である。心が折れたときに、どうサポートしていくか。大学にはカウンセリングルームもあり、教授に相談することもあるが、もう少し、地域の方々が声をかけてくれるようなことがあればと思う。

留学生については、外国籍市民懇話会でもよく出てくる意見だが、倍増して大丈夫かという心配がある。宿舎だけでなく、金銭的な面が大きい。

下鴨神社の巫女さん、旅館の仲居さんなどを留学生がやっている例があり、こうした京都ならではの、留学生がアルバイトしやすい仕組みが、観光、大学と連携してうまくできればいいと思う。

留学生でも大学院生では、パートナー連れ、家族連れが多くなり、定住者と同じサポートが必要になるが、国際交流会館は遠いという意見が出ている。サポートの拠点を分散化できないかと考える。

辻委員

観光案内所が、繁華街である四条河原町などにはない。フランスのシャンゼリゼには何十年も前からあり、ワンストップサービスが受けられ非常に助かる。

また、京都に来る観光客は欧米の人が多いが、日本の観光客が多いスイスのグリンデルワルトには日本人の観光案内所が駅前にある。京都にも、京都に住んでいる英語圏の留学生を使った観光案内所があってもよいのではないか。

留学生向けとしては、「いつでもコール」の英語版があればと思う。

岩井委員

商工会議所のパソコン教室に通っているが大変人気がある。例えば、京都市が恒常的に外国語を教える講座を開けば人気が出るのではないか。市民が外国人に対して関心を持つようになるし、老化の防止にもつながる。

平井委員

国際化について、京都市民の国際化はあまり進んでいない。行政どうしの姉妹都市で

あつたり，文化交流していても芸術家だけだったりで，本当の市民交流を見る機会がない。もっと市民の国際化を進める必要がある。

分かりやすいところで，国際的なイベントがもう少し京都で開かれればと思う。観光の分野とも連携してくると思う。

堀場部会長

継続は力なり，という。それぞれが小さいことであっても継続していくことで定着し，膨らませていくことができる。それをいくつか選択してやらなければならないと思う。

いくつかのポイントを明確にして次の議論に結び付けていければと思う。

次回は「行政経営の大綱」をテーマに議論を行う。

——（事務連絡）——

4 閉会